

読解指導と読書指導の関連

－「みんなの『はつ耳』をあつめよう！なでしこどうぶつランド」の実践－

笥 理沙子

1. 課題意識

子どもの周りには、図書や資料の情報はじめ、新聞やテレビ、インターネット等の情報など、多種多様な情報が取り巻いている。こうした情報化社会においては、複数の図書や資料から情報を読み取って理解し、自分の意見を深め、生活の中で活用していく力が重要となる。文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、コミュニケーション能力育成の必要性や、情報化社会の進展に伴って、様々な情報を速やかに処理・判断する能力、情報を取捨選択する能力、要点をまとめ発信する能力が求められると述べられている¹。さらに、こうした能力は生涯にわたって発達していかねばならないという見地から、国語教育と読書活動を密接に連携させ、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」¹ことが必要であると提言している。

そこで、国語教育と読書活動を密接に連携させ、共通学習材で学習したことを生かして、関連した図書資料を読み取っていくことによって、実生活に生きてはたらく国語の力になると考えた。読解指導と読書指導を関連させて授業を展開していくことによって、興味・関心をもちながら主体的に読み、様々な情報に接しその交流を図ること、図書や資料などから自分にとって必要な情報を見付ける、読んだことを自分なりの言葉で語って発信していく等の読む力も育成され、読書にも親しんでいくであろう。

2. 研究の視点

(1) 学習環境デザインのコンセプト

本や友達、自分と向き合いながら動物の赤ちゃんの「初耳」と出合う読みの学習

府川は、「読解」や「読書」について「『読解』も『読書』も、ともに読むことの基礎であり、同時に基本」²だと述べている。つまり、「幅広い読書に支えられない読解はそこが浅くなるし、字面を追うだけの読解だけでは読書の面白さも体得できない。両方の活動が〈読み〉の面白さという一点で手を握ったとき、初めて充実した主体的な〈読み〉が姿を現す」³のである。

そこで、教科書の共通学習材とともに関連する並行読書材を組み合わせて活用して学習していきたい。そのためには、共通学習材や並行読書材（テキスト）と向き合いながら読んでいくことが必要だと考える。また、秋田は「読みの授業では、対話や議論を通して、文章についての互いの考えをとりこみ合うことにより理解を深めよう。」⁴と述べており、友達とも向き合い、対話していく必要がある。さらに、「文章を理解する過程とは、読み手が自分の既有知識を用いて、文章に書かれていることについてまとまりのある心的表象を構成する過程」⁵であると述べているように、文章を読み、理解していくためには自己とも向き合っていかなければならない。その際、無目的に読んでいくのではなく、「へえ～、知らなかった！」「そうなんだ、びっくり！」という説明的な文章の読みの面白さの1つを取り上げて「初耳」と出合いながら読んでいく。

したがって、「本や友達、自分と向き合いながら動物の赤ちゃんの『初耳』を見付ける読みの学習」をコンセプトにすることにより、「読解」に偏るのではなく、「読書」に偏るのでもない読みの学習を目指したい。そうすることにより、「読む」という行為の面白さが実感でき、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」¹ことができるであろう。

(2) 学習環境デザインのコンセプトを実現するための「メディア」とは

①並行読書材

秋田は学校における読書環境づくりにおいて「自分が選んだ本のおもしろさを共有したい、伝えたい人に伝えられる場を設定することやその本のことを自分が伝えることで自己効力感を持てるような状況を作ること、つまり多様な本の紹介や同じ本を皆で読み合っ読書の感想を交流し合うという一冊の本から多様なひろがりへという流れをもった環境づくり」¹⁴が大切だと述べている。共通学習材だけだと1冊の本から多様なひろがりにはまではなかなかつながらないが、共通学習材に関連する動物の赤ちゃんに関する図書資料を並行読書材として教室に置いておくことで、子どもたちは興味を示して手にとって読み、動物の赤ちゃんに対する興味・関心が高まるとともに、知らなかったことを教えたい、知らせたいという気持ちが起り、「共有する価値ある課題」も見付けられると考えた。そして、単元の終わりに「なでしこどうぶつランド」を開くことでさらに別の本にも手を伸ばす姿が期待でき、一冊の本から多様なひろがりをもつ学習環境となるであろう。また、多読を通して今後「ことば」にもより着目するようになるのではないかと考える。

②紹介カード

本単元では自分が選んだ動物の赤ちゃんについて「初耳」と出会いながら読み、紹介カードを作成していく単元を構想している。大熊は、「低学年の子どもたちは、実際に何のために学習をしているのか、そのゴールを具体的にイメージできないと意欲的に学習に取り組むことが難しい。活動目的なゴールの設定こそ、単元の鍵を握っていると考える。」¹⁵と述べており、単元の導入で教師自作の紹介カード(図1)を提示し、紹介カードを作りたいという気持ちを喚起させ、紹介カードにはどのようなことを書けばよいかを全体で確認する。そして、「初耳」と出会いながらテキストを読んでいくことで、「読解」に偏るのではなく、「読書」に偏るのでもない読みの学習につながっていくと考える。紹介カードを作成することが、テキスト内容をより深く理解したいという気持ちにつながるるとともに、「知らなかった!」「びっくり!」と思えるような他の本も読んでみたいという気持ちにつながるであろう。また、紹介カードを作成するためにテキストと向き合っていくし、友達とも交流していき、そして自分にとっての「初耳」と出合うためには自分が知らないことは何かを考えていくので、自己とも向き合っていくはずである。

図1

表紙

1 ページ目

2 ページ目

表紙

ライオンの
赤ちゃんの
はつ耳

1 ページ目

2 ページ目

中をめくると

書き抜きの説明や感想
(言語についての知識・
理解・技能イー(カ))

自分にとって「知らなかった!」
「びっくり!」と思った叙述の書き
抜き (C読むことエ)

成長の様子
(C読むことイ)

③一単位時間の学習過程

読解指導と読書指導とをより連携させていくために、特に第二次の学習過程を工夫する必要がある。具体的には、共通学習材で学習したことが並行読書している自分が選んだ図書資料にもすぐに活用できるように、第二次の一部分

では1単位時間の前半で共通学習材を、後半で自分が選んだ図書資料を、読んだり紹介カードを作成したりする学習過程をとった。(学習指導計画の※印の部分) そうすることにより、単元全体が一貫した課題解決の過程となり、無目的に読んでいくのではなく、「へえ〜、知らなかった!」「そうなんだ、びっくり!」という説明的な文章の読みの面白さの1つを取り上げて共通学習材や自分が選んだ図書資料どちらのテキストも「初耳」と出会いながら読んでいくことができると考える。

3. 授業の実際

(1) 単元名・活動名

単元名 みんなの「はつ耳」をあつめよう! なでしこどうぶつランド

学習材名 『どうぶつの赤ちゃん』(光村図書 1年下)、どうぶつの赤ちゃんシリーズ

(2) わらい

- 動物の赤ちゃんに興味をもち、進んで動物の赤ちゃんに関する図書資料を読んだり、「知らなかった!」「びっくり!」と思ったことを友達に伝えたりしようとしている。(国語への関心・意欲・態度)
- 動物の赤ちゃんに関する図書資料を、時間や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読んだり、「知らなかった!」「びっくり!」と思った言葉や文を書き抜いたりすることができる。(読むことイ、エ)
- 主語と述語の照応関係に注意して、文や文章を読んだり書いたりすることができる。

(言語についての知識・理解・技能イー(カ))

(3) 授業の分析・考察

①学習指導計画(全11時間)

0次: 遠足で多摩動物公園に行ったり、生活科で飼育小屋の動物と触れ合ったりする。

動物の赤ちゃんに関する図書資料を学級文庫として置き、それらの本を読んで動物の赤ちゃんへの興味・関心を高めておく。

第一次: 学習課題を理解し、学習の見通しをもつ。

…2時間

第二次: ①共通学習材で、ライオンとしまうまの赤ちゃんの生まれたばかりの様子を探しながら読む。

②共通学習材でカンガルーの赤ちゃんの生まれたばかりの様子を探し、並行読書している図書資料で自分が選んだ動物の赤ちゃんの生まれたばかりの様子を探しながら読む。※

③共通学習材で、ライオンとしまうまの赤ちゃんの大きくなる様子を探しながら読む。

④共通学習材でカンガルーの赤ちゃんの大きくなる様子を探し、並行読書している図書資料で自分が選んだ動物の赤ちゃんの大きくなる様子を探しながら読む。※

⑤共通学習材及び並行読書している図書資料を読み、動物の赤ちゃんの「初耳」な言葉や文を書き抜く。

※(本時7時間/全11時間)

⑥共通学習材及び並行読書している図書資料の書き抜いたところについての説明や感想を自分なりの言葉で書く。※

⑦共通学習材及び並行読書している図書資料で赤ちゃんの成長の様子をまとめる。※

⑧「なでしこどうぶつランド」の紹介カードを完成させる。

…8時間

第三次: 「なでしこどうぶつランド」を開き、友達に自分の発見・驚きを紹介する。

…1時間

保護者にも見てもらい、感想をもらう。

…課外

②本時の様子と指導

○本時の目標

自分の選んだ動物の赤ちゃんの様子の中から「初耳」な叙述を選んで書き抜くことができる。

○本時の学習

前時までに動物の赤ちゃんの生まれたばかりの様子、大きくなる様子に着目しながら叙述を読み取ってきたが、それらの中から自分にとっての「ベスト・オブ・初耳」を選んで書き抜く学習を行った。

まずは授業の前半で共通学習材を読み、「初耳」な叙述を選んだ。選んだらワークシートに書き抜く。全文の掲示物に「初耳マーク」を貼る(写真1)。「初耳マーク」を手がかりに相手を決め、ペアになって交流コーナーで交流をする。これら一連の活動は自分でどれから始めてもよい。したがって、先に自分で選んで「初耳」な叙述を書き抜く児童もいれば、なかなか選べずに先に交流する児童もいた。「私はいはいできるまで時間がかかったのにしまうまの赤ちゃんは生まれて次の日に立てるなんて知らなかったびっくりした!」「もっとライオンの赤ちゃんは大人に似て強いと思ってたのに違っていた」「カンガルーの赤ちゃんは目が見えないのにお母さんのお腹の袋に入れるなんてすごい!」などと交流し、本や友達、自分と向き合う姿が見られた。それにより、自分で「初耳」を選べた児童は選んだ叙述や理由、感想が様々あることに気付くことができるとともに、選べない児童や「初耳」が見つからない児童は、友達の話を参考にして自分なりに選ぶことができた。

そして、授業の後半では自分が選んだ動物の赤ちゃんの図書資料から「初耳」な叙述を選んだ。共通学習材よりも文章量も多く、自分達が選んだ動物の種類也多岐に渡っているので、選ぶのが難しそうな児童もいたが、前半の学習を生かして友達との交流から自分なりに「ベスト・オブ・初耳」を選んでいった。ある児童はキリンの赤ちゃんの初耳として「生まれてから数時間後には自由に走り回れるようになります。」という叙述を書き抜いた。本時では「ここは初耳だから」という理由で交流していたが、様々な友達と交流をすることにより、次時に書いた理由では「生まれてから数時間後には自由に走れるってびっくり。しかも、シマウマは1日経つと走れるけど、キリンは数時間後には走れるってもっとびっくりしました。」と記述していた。これは、別の児童が「ゴリラがライオンと同じようにオスだけ群れから離れるからびっくりしたよ。」と話しており、他の動物と比べる言い方が、自分の言いたいことにも合致していたようで、それを参考にして理由を書いていた。

写真1

この部分は
公開に適さないため
掲載できません。

4. まとめ

読解指導と読書指導をつなぐものとして「初耳」をコンセプトにしたが、理由を説明する際に上述の児童のように「初耳だから」と答えてしまうとそこで思考がストップしてしまう。今回、「ベスト・オブ・初耳」を自分なりに選ぶ学習だったが、選んだ理由だけでなく、選ばなかった理由も語ったり、「自分にとって」だけでなく友達に伝える価値のある「初耳」なのかというところまで考えさせたりする必要があった。しかし、語りを誘発していた姿も見られ、無目的に読むのではなく、「へえ～、知らなかった!」「そうなんだ、びっくり!」という説明的文章の読みの面白さの1つを取り上げて「初耳」と出合いながら読んでいくことは、興味・関心をもちながら主体的に読む、自分にとって必要な情報を見付ける、という力は身に付いたのではないだろうか。何より、完成した後には友達やお相手さんに見てもらい、感想を交流した(写真2)ことで自分の発見や驚きを共有できた、知ってもらえて嬉しいという喜びを体験し、自信へとつなげていくことができた。

写真2

この部分は
公開に適さないため
掲載できません。

¹文化審議会答申 2004 「これからの時代に求められる国語力について」

²府川源一郎 2001 『自分のことばをつくり出す国語教育』

³秋田喜代美 2001 『文章理解の心理学——認知、発達、教育の広がりの中で』

⁴秋田喜代美 1998 『読書の発達心理学——子どもの発達と読書環境』

⁵大熊徹 2012 『国語科学習指導過程づくり—どう発想を転換するか—習得と活用をリンクするヒント』